

I S 短編集

ダス・ライヒ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

IS インフィニット・ストラトスの短編集です。
没ネタとか、俺設定なSSなどが多数含まれます。

目次

キツテルとIS	1
ヤザンが来た!	11

キツネルとIS

無限の可能性を秘め、女性だけにしか使うことを許されない鎧であるIS、インフィニット・ストラトスが存在する世界のインド洋。その海を航行する一隻の船があった。

船のサイズは大型級でフェリークラス、それも軍艦の飛行甲板を持つ強襲揚陸艦だ。いささか大きい強襲揚陸艦を、二隻のミサイルフリゲート艦が随伴している。海軍の単位で言えば、戦隊である。

そんな戦隊の旗艦である強襲揚陸艦の甲板に、巨大な人型兵器と機械のような物を纏った小柄な少女が降りて来る。

先に甲板へと降りたのは、全高十八メートルのMSモビルスーツと呼ばれる人型兵器だ。外見は凄まじく特徴的で、両目と口、頭にはV字のアンテナを持つガンダムと呼ばれる類のMSだ。

機体の名前はZGMF-X56Sインパルスガンダム。初代のRX-78-2ガンダムと同じく、上半身と下半身、コアとなる戦闘機の三つが合体してMS形態となる機構を導入し、戦闘継続力と生存性を兼ねている。

更にはシルエットシステムと呼ばれる換装システムを備えている。高機動戦闘用、近接戦闘用、砲撃戦用と三つがある。

背中には高機動戦闘用の物が搭載されており、今はフォースインパルスガンダムとなる。

「うわあああー！」

「もうちよつとゆつくりと降りて！ 船体が傾く！」

そんな巨大な物が甲板に着地した所為か、船体は揺れて甲板要員は思わず倒れそうになる。

着地と言うか、着艦したインパルスに対し、女性の班長は大声で注意する。これに乗っているパイロットは、胴体のコクピットのハッチを開けて身を乗り出し、大声で謝罪する。

「すまない！ まだ慣れていないんだ!!」

「そう！ なら、電源を落としておいて！ ここには、敵は居ないから！」

「了解した！」

まだMSの操縦に慣れていないと謝罪すると、班長は理解してインパルスガンダムの電源を落としておくように伝えた。

これに応じてパイロットは機体の電源を落とすし、機体から降りて来る。機械を纏っている少女も、まだ慣れていないのか、誘導員の指示に応じてなんとか甲板に降りていた。

降りたパイロットに、強襲揚陸艦の艦長が副長などを伴って挨拶してくる。

「我が艦によろこそ。ニコラウス・アウグスト・フォン・キッテル空軍大佐殿」

「受け入れに感謝する、艦長殿。すまんな、慣れない着艦の仕方です」

「なに、誰もがそんな物です。あのISは何かの任務で？」

挨拶しに来た艦長に対し、ニコラウス・アウグスト・フォン・キッテルは、慣れない着艦の仕方では船を揺らしたことを謝罪すれば、艦長は初めてのことでだから仕方が無いと言って彼を許す。

艦長は事前にキッテルがMSに乗って来ることを知らされていたのか、名前を知っていたようだが、随伴してきたIS、インフィニット・ストラトスのことは知らなかったらしく、何の任務で来たのかと問う。

「ああ、あのISか。ベビーシッターを押し付けられてな。私は的役だよ」

「的役？」

「標的機だよ。つまり、この海域で演習を行うのさ。指令書はまだ読んでないのか？」

やって来た理由を問われたキッテルは、自分はこのISの標的機で、その演習をするために来たと答え、指令書を艦長に渡す。それを手に取って記載されている内容を読んだ艦長は、偉人のような風格を漂うキッテルが、標的機に乗せられた理由を問う。

「いったい何をされたんです？ 貴方のことは存じ上げないが、目を合わせれば偉人のように見える」

「そんな風に見えるのか、私は。まあ、勝手をし過ぎてな。懲罰任務

や」

「ほう、勝手にし過ぎたと。この手のMSの部品や弾丸の類は、我が艦には備蓄されておりません。エネルギー補給くらいは出来ませんが」
「それで良い。一時間後に演習を行う。指令書に記されている海域まで移動してくれ」

その問いに、キツテルは軍人なのに勝手にし過ぎて懲罰を食らったと答えれば、艦長は納得してインパルスガンダムの予備パーツと弾薬がないことを伝えた。それにキツテルは演習なので必要ないと答え、一時間後に演習を始めることを伝えた。

「了解しました。では、一時間後に。部下に部屋を案内させます。それまで部屋で待機を」

指令書に記された海域の地図を見て、艦長は長年の船乗りのしての感で場所を把握すれば復唱し、案内は部下に任せて艦橋へ戻っていた。

キツテルはISを解除して待機状態になった物を掴み、女性海軍士官の案内されながら向かう少女を見て、あんな愛らしい少女が、通常兵器のみならず、自身が駆るインパルスガンダムでさえ凌駕しかねない性能を誇るISと呼ばれる物を扱う者なのかと疑う。

「生きている世界で似たようなのが居たが、まさかあんな少女がこの世界において最強の兵器を扱うとは…」

キツテルはISを解除して待機状態になった物を掴み、女性海軍士官の案内されながら向かう少女を見て、あんな愛らしい少女が、通常兵器のみならず、自身が駆るインパルスガンダムでさえ凌駕しかねないISと呼ばれる物を扱う者なのかと疑う。

元々ISは、無限の可能性がある宇宙で活動するために天才科学者である篠ノ乃束しののたばねが開発した物だが、白騎士事件と呼ばれる世界の常識を変えた世界最大規模の事件により、超兵器と言う認識が高い。この事件は開発者の自作自演であるが、結果は本人の意図とはかなり違う結果となっている。

その原因は、多国籍軍がこのISを鹵獲するため派遣した三個艦隊からなる連合艦隊を、戦闘力の高さに艦隊は数十名の負傷者のみにし

て全滅させたことであろう。更に核兵器よりもクリーンであることで、軍事転用化は止められなかった。

これによりISは本来の宇宙進出よりも軍事転用されたが、束と意図なのか反抗の意思なのか、女性しか動かせないと言う兵器としては致命的な欠点があった。

無論、ISの軍事転用に対して極右と極左などを初めとしたタカ派系統の組織に属する男性側は断固反対し、暴力的手段、テロ紛いな行為、夜中に束を襲い掛かると言う暴挙などの手段を選ばぬ妨害行為で止めようとしたが、男性側の地位を失墜させただけでなく、女性側の推進を促してしまい、ISの軍事転用が決定的となる。

これを黙って男性側のタカ派が許すはずが無く、更なる過激な手段でISを潰そうとする。それに賛同した男たちの数は多かったが、タカ派が起こした過激な妨害活動に異議を唱える男も多く、優秀な軍人や知識層の多くがIS側に回ってしまう。

かくして、三年以上にも渡るIS側と反IS側による血で血を洗う抗争が始まった。ISによって地球に平和をもたらされると信じられていたが、男と女の争いを引き起こし、女尊男卑思考を抱かせる要因となってしまった。

当初は反IS側の数が多かったが、ISの圧倒的な性能を前に敗退を重ねるばかりであり、抗争開始半年でIS側が圧倒的となる。戦力を多く削られた反IS勢力は、力尽くの正規戦からゲリラ戦に切り替え、敵の消耗を図る。この反IS勢力の戦略方針が、三年以上にも抗争が長期化した原因である。

原因はそれだけではない。ISの過剰な戦闘力の高さに危険視し、戦闘による操縦者の精神に多大な負荷を掛けるためか、ISをやむを得ない場合を除いて戦闘に投入することは禁止したことだ。

IS側は特殊部隊や対ゲリラ戦に長けた部隊で反IS勢力を排除を続けたが、被害は少ないはずがなく、大勢の兵士たちが散っていった。被害者は軍人や民兵、傭兵ばかりでなく、反IS勢力の無差別テロで大勢の民間人にも被害が出ており、そこに第三国の社会インフラの破壊に伴う飢餓状態も重なり、抗争が終わるころには、地球総人口

七十億の内一億人が死亡し、六九億となっていた。これを人々は「死の千日」と呼び、忌まわしき三年間として記憶した。

だが、未だに活動を続ける反IS勢力も居り、そればかりか潜伏場所も掴めておらず、完全に平和と言うわけには行かなかった。

勝利したISは発展を続け、今では第四世代にまで達し、無限の可能性を感じさせるほど進化している。だが、ISを意図したことに運用しないことに束が腹を立てたのか、製造されたIS、正確には製造されたコアは、四六七機に止まっている。この少なさに、運用委員会は四苦八苦している。

その性能の高さはキツテルが属するワルキューレが目につける物であり、束に宇宙における活動をすると言って新たに数十機のコアを製造させた。半数を宇宙活動に運用されたが、残り半分は戦闘に使われ、現場からは採用を求めめる声を求めている。

そんな一億人の死体の上に立つ曰くつきの兵器と戦うこととなったキツテルは、この世界に来るまでに見た成り立ちを記した書物を見て、やるせない気持ちとなる。

だが、これは任務だ。生前も今も軍人であるキツテルは、その与えられた任務を全うする義務がある。例えば、機体が乗り慣れていないであろうと、パイロットしてベストを尽くすまでだ。

「キツテルがIS世界に居るだとお？」

キツテルがISの演習に向けて休息をとる中、宇宙の秘密基地内において、ヤザン・ゲイブルは彼が自分の居る世界に来ていることを知った。

野獣のような目付きと金髪に浅黒い肌と言う出で立ちの彼は、宇宙世紀と言う世界でMSを駆って戦闘を楽しんでおり、復活して早々に連邦軍との大規模な戦闘で存在を現したキツテルに目を付けていた。それを自分の属する陣営のボスより聞かされたヤザンは、キツテルと戦えることに喜びを感じる。ヤザンはキツテルと戦うことを望んでいたのだ。

「へへっ、ツキが回ってきたようだな！ でっ、ボス。レッドバロン二

世殿はどこに居るんだ？」

『インド洋にて、ISとの演習をやっている。情報によれば、標的機のパイロットとして、ルリ・カポデイストリアスが乗る専用ISと戦っているようだ。慣れぬMSに乗ってな』

「おいおい、的役かよ！ でっ、乗っているMSは何だ？ ジムか？
ダガーか？」

そのボスは鬘付きの奇怪な仮面を着けており、素顔を隠していた。ヤザンとボスは対等な立場であり、彼の下についているヤザンは敬語ではなくため口で話している。そんな彼がキツテルがどんなMSに乗っているのかを問えば、ボスはインパルスガンダムに乗っていると答える。

『ZGMF-X56Sインパルスガンダムだ。ファーストを意識したガンダムを標的機にするとは、戦乙女たちはガンダムに何か恨みがあるのかと思うくらいだ』

「ガンダムか…！ よりにもよって、ガンダムとはな。だが、相手にとって不足は無い！ ISとやらは好かんが、ガンダムに乗った英雄様と戦えるなら十分だ。早速行くぜ、ボス」

『単機では、邪魔が入ろう。私が現地に供給したMSを装備した部隊を使うと良い。邪魔者を止められることは出来るだろう』

「へっ、全くあんたには感謝の言葉しかねえな」

キツテルが乗っているMSがガンダムと言うことに、ヤザンは不満は無いと判断する。それに邪魔者を抑えてくれる部隊まで使わせて貰えるので、礼を言ってからキツテルと戦うために地球へと降りる準備をした。

一時間後、予定通りにキツテルのフォースインパルスガンダムとルリの専用ISとの演習が行われた。

「碌に慣らし運転していない機体でやるとはな…！」

ルリのISが持つ兵装から放たれるビームを躲しつつ、キツテルは全く試運転もしていないインパルスガンダムに乗せられたことに不満を漏らす。

彼はバルキリーの搭乗時間は生前以上であるが、MSには暇潰し程度にしか乗っていない。それに全く動かしたこともないガンダムに乗せられているので、苦戦を強いられている。

何よりキツテルが乗っている機体が大きく、向こうのルリが乗るISは小さくて、ビームライフルの照準を合わせづらい。元々MSと戦うことを前提にして設計されているので、小さいISとの戦闘は論外だ。それなら頭部と胸部のバルカン砲を使えば良いのだが、標的機として使うことを前提にしており、一発も装填されていない。酷い扱いだ。

対するルリのISは、右手に打撃武器のロッドと左手の掌に内蔵されているビーム砲、全方位オールレンジ攻撃用の二十基の自立型ビーム発射器。ガンダムがある世界で言えば、ファンネルの類である。以降、ビットと呼称しよう。

もはや、キツテルのことを標的機としか見ていない。

「おまけにバルカン砲の弾丸も装填されていない！ 全く、余ほど私を的にしたいようだ。演習で良かったよ」

これが実戦なら、キツテルはこの悪条件で自分の運を総動員して戦っていた事だろう。演習であることに感謝しつつ、キツテルはルリのISから繰り出されるビームの嵐を避けながら、ビームライフルで反撃を行うが、的が小さすぎて当たらない。

「むう〜！」

「ムキになるな！ そうなっては相手に勝てんぞ！」

自分が撃っているビームが全く当たらないことに苛立ったルリに対し、キツテルは熱くなるなど論ずる。生前も周辺国で教官をやっていた経験もあるキツテルであるが、ルリはその教え子たちより苦労する物だ。真正面から来て当たるビームは盾で防ぎ、ライフルで撃ち返す。

それを二回か三回ほど繰り返していると、キツテルの反撃で放ったビームが、ルリのISに命中した。言い忘れていたことだが、ISには絶対防御と呼ばれる搭乗者を守る防御装置が搭載されている。演習とはいえ、何かしらの予想外の出来事で死亡する可能性があるの

で、インパルスガンダムのビームの威力は絞られている。

搭乗者のルリは無事であり、当てられたことに呆気を取られていたが、キツテルの注意を受けて正気に戻る。

「どうした!? 戦闘に戻れ! そのマシンは、一発程度では落ちんの
だろ!」

その言葉にルリは正気に戻り、ビットを全機展開してキツテルのインパルスガンダムに全方位オールレンジ攻撃を仕掛ける。

「この攻撃は、厳しいな! 魔導士でもこんなことは出来んぞ!!」

四方八方から放たれるビームに、流石のキツテルも回避に専念する他なく、反撃も碌にできなかった。そんなキツテルに、ルリは脳に多大な負担を掛けるオールレンジ攻撃の操作を物ともせず、接近戦を仕掛けるためにロットを持ってビットを操作しながら接近する。

「接近戦をする気か!? 当たっても知らんぞ!」

「はあああ!!」

ビットを操作しつつ接近してくるルリに自分の攻撃に当たる危険性があると言うが、当の彼女は聞く耳を持たずに向かってくる。このオールレンジ攻撃で自分の動きを封じたと思っただろうが、先ほと言ったとおりに、自分のオールレンジ攻撃に当たる可能性がある。それが分かっているのかと、キツテルは後先考えずに突っ込んでくるルリのISに思う。

そちらがその気ならと、キツテルはライフルを腰のラックに装着してからフォースに搭載されている近接戦闘用のビームサーベルを抜き、ロットで殴り掛かって来るルリに、ビームを躲しながら備えた。

「やあああ!!」

「来るか! それは蛮勇だ!」

オールレンジ攻撃に晒されているキツテルのインパルスガンダムに、ルリは自分の攻撃に当たることも顧みずに接近する。

「オールレンジ攻撃を止めた? 良い判断だ。だが、当たってやる気は無い!」

その瞬間、ビームのオールレンジ攻撃が止んだ。このルリの判断にキツテルは褒めたが、わざわざ当たってやる気は無く、無慈悲にビー

ムの刃を振り下ろした。

演習用に威力が絞られたビームの刃であるが、これが振り下ろされるのを見ているルリは、敗北したと思っていた。だが、彼女もただ負けるつもりは無く、それを躲してロッドをインパルスガンダムに叩き込もうとする。しかし、キツテルはルリの行動を読んでいた。

「ほう、流石だ。予想通りだがな！」

叩き込む前にキツテルは機体の左手でルリのISを掴み、彼女を捕まえた。

「ううう！ 離せえ〜！」

「投降しろ。君の負けだ」

必死に抵抗するルリであるが、機体の力は強くて身動きが取れない。ビットで左手を破壊しようとしたが、キツテルはルリがそれをやることを予想しており、ビームの刃を近付け、投降するように通告する。標的機が勝ったのだ。

「やれやれ、標的機が勝ってしまったぞ。また面倒なことになるな。素直に当たっていれば良かったか」

自分が標的機なのに勝ってしまったキツテルは、また面倒なことをやらされると思い、素直に的役に徹していれば良かったと後悔する。

なぜ実戦式の演習になってしまったかは、この世界で最強の兵器であるISを扱うルリに対し、その兵器を扱う責任感を持ってもらう為に、指示されたこととは違う行為をやったのだ。つまり、命令違反である。

生前も今も何度かやって叱られてきたことだが、これは不味いと流石にキツテルは思う。

だが、ISは核よりもクリーンであるが、危険な代物だ。それを駆るルリに対し、キツテルは彼女を解放してからISをアクセサリー扱いしないように論じた。

「済まなかったな、カポディストリアス。だが、それは核兵器よりも強力で、三個艦隊を粉碎するほどの戦闘力を誇る最強の兵器なのだ。アクセサリーではない」

「うん…」

不満げに、ルリはキツテルの説教に応じた。

「では、帰投する。後で菓子でも奢ってやる。さて、始末書を書かねば」

帰投したら菓子を奢ると約束してから、キツテルはまた始末書を書かねばならなくなったと思いつながら、ルリと共に母艦への帰投を始めた。

この後、ヤザンと交戦することなど思いもよらず…。

ヤザンが来た！

キツテルとルリが母艦に帰投した頃、ヤザンは搭乗機と共に地球に降下し、現地で活動する武装勢力と無線で交信していた。

そのヤザンが乗っている機体は、ZGMF-X24Sカオスガンダムである。キツテルが乗っていたインパルスガンダムと同時期に開発されていた機体であり、ヤザン専用の為か、海へビが装備されている。

「よう、スポンサー様の代理で来てやったぜ。テメエらが持つてるウイダムム六十機、直ちに寄越しな」

『な、なに!? いきなり来て当基地のウイダムム全機を寄越せだど!? ふざけるんじゃない! あれは基地の制空権に必要不可欠な戦力だぞ! スポンサーの代理だかなんだか知らんが、貴様の言うことなど聞か!』

キツテルと戦うことに集中すべく、ヤザンは邪魔者を寄せ付けない戦力を欲し、自分のボスが援助している武装勢力に、供給した連合軍のMSであるウイダムム六十機を自分の指揮下に置くように指示を出したが、基地司令官はそれを容認しなかった。

当然のことであるが、ヤザンは恐喝紛いなことを言っつて、無理に基地司令官より戦力を出させる。

「うるせえぞ! MSもA^{アームスレイブ}Sも無けりやあ、女にも地元^{アームスレイブ}の連中にも威張らねえ玉無し野郎共が! 誰がテメエら見てえな、取るにも足らねえカス共を援助してやってるか分かってんのか!? それ以上断るなら、このヤザンがテメエをぶつ殺してでもウイダムムを貰っつていくぞ!?! それで良いならな!?!」

『うっ...!? わ、分かった...! それだけは止めてくれ! 基地のウイダムム大隊を貴官の指揮下に入れることを許可する...! 基地の守備は、AS二十機で十分だ!』

「分かれば良いんだ。お前さんらは、大人しく俺たちスポンサーの言う通りにやってりやあ良いんだ。それにお前らをどん底に追い込んだ、女どもを凶に乗らせているISをやっつけられるんだ。本望だろ

うて」

『あつ、ああ！ 貴官の言う通りだ！ 我々男性解放軍は、IS打倒の為に協力してくれる貴官らモニターク商会に感謝している。健闘を祈る！』

ヤザンの気迫にやられた基地司令官は、冷や汗をかきながら彼の要望を聞き入れ、ウインダム六十機を貸した。同時に援助してくれたことを感謝しつつ、健闘を祈ると言って無線を切る。

「けっ、通りで子どもに取って代わられる訳だ。腑抜けばかりで、縮み上がった連中だ。どうして、ボスはこんな奴らに援助なんぞ。一銭にもならねえぜ」

先の脅しに屈した基地司令官の態度を見て、ヤザンはなぜこの世界が女性に取って代わられた理由を理解した。おそらく女性しか扱えないISが登場しなくとも、遠い未来、女性に取って代わられる物と判断する。

「約束通り来たな。約束を守ることだけは褒めてやる」

約束通り、ジエツトストライカーを装備したウインダム六十機が来たことに、約束を守っただけのことは褒めた後、ウインダム部隊に向けてISの討伐に出ると通信で告げる。

「良く来たな、お前たち。これから俺たちはISをやっつけに行く。誰が今まで世界を発展させて来たかを、凶に乗っている女たちに向けお前たちの手で教えてやるんだ！ 俺は女どもの用心棒の相手をする！ お前たちはISを包囲してやっつけるんだ！ 分かったな!？」

『はっ！』

やって来たウインダム全機に向け、士気を向上させる連絡をすれば、乗っているパイロットたちは意気揚々に返答した。

「さて、いつまで持つかだ」

だが、ヤザンは六十機のウインダムのパイロットに一切の期待していなかった。彼は六十機のウインダム隊の練度の低さを見抜いていたのだ。操縦訓練はある程度は済ませているようだが、部隊運用の訓練は殆ど受けていないようだ。おまけに実戦経験はこれが初めてだ。動きの良いのが居るが、六機くらいだ。おそらく教官が乗っている。

熟練で練度や士気も高い同じMS部隊を相手にすると、一瞬で士気が瓦解して壊滅しかねず、通常兵器の部隊相手でも、その部隊が巧みな防衛戦を行えば、壊滅は免れないだろう。

あれだけ居ても、ISを落とせるには五分五分と言ったところだ。そんなことを気にしつつ、ヤザンは六十機のウインダムと共にキツテルが居る海域へと向かった。

『ポイントチャーリーにて、多数の国籍不明並びに識別不能機を確認！

各員、警戒態勢！』

「何っ!? ここは後方だぞ!」

自分のために用意された部屋で、始末書を書いていたキツテルは、艦内に響く所属の識別不能機の発見を知らせるアナウンスに、直ぐに敵だと分かった。だが、この世界は安全な後方に当たる。敵に攻撃される可能性が低いはずだが、それが出現したので、万年筆を仕舞ってからハンガーに急ぐ。

途中、スーツを着た民間人の黒髪の女性とワルキューレ空軍の女性参謀が口論している場面に出くわす。スーツの女性の隣には、IS専用のスーツを着たルリが立っている。

「カポデイストリアスは民間人だぞ! 戦闘に出すなど何を考えている!」

「織斑女史、彼女が乗るISは第四世代です。現状の戦力内で性能は一番上です。不測の事態に備えるために、編成からは外せませんね」
「だからと言って、それを了承する教師がどこに居る!」

話を聞くに、織斑と呼ばれる女性はルリの教師であるらしく、民間人の彼女を編成に加える女性参謀に対して抗議している。

警戒態勢に口論を始める二人に対し、キツテルは止めさせるために彼女らの間に割って入った。

「失礼する。フロイライン、今はいつ敵が攻撃してくるか分からん状況だ。気持ちは分かるが、口論は止めて頂こう」

「口論? 何を言う、お前たちは民間人、あんな女の子を戦闘に参加させるのか?」

「女の子？ ルリのことか。大丈夫だ、私も出撃する。ルリには予備戦力として待機してもらっただけだ。出ることも無いだろうが、そうならないように努力する。参謀殿、増援部隊はどのくらいだ？」

確かに教え子を戦闘に出すことを認める教師は、そうは居ない。教え子であるルリを心配する織斑に対し、キツテルは予備として待機してもらっただけで、出撃することが無いように努力すると約束した。

次に参謀に、正体不明の部隊を迎撃する友軍部隊の規模を聞く。

「ライセンス持ちですか？ 友軍部隊は第三世代のIS量産機、ヴァルキュリア・アーマー六機で編成されたIS第三中隊と、バーザム並びバーザム改二個中隊です」

「二個混成大隊か。天と地がひっくり返らない限り、大丈夫だ。教え子が出撃することは無いだろう」

参謀より迎撃部隊の規模と編成を聞いたキツテルは、織斑にルリが出撃することは無いと告げる。

「第三世代をもう正式採用していることには驚いたが、貴方の目を見れば、安心できる。貴方が誰だか知らないし、初対面の身であるが、カポデイストリアスが出るこの無いように頼む」

「私も元からそのつもりだ。ルリは民間人だ、いくら我々より高性能な戦闘兵器に乗っけていてもな。では、出撃するので失礼する！」

「では、私は戦闘を指揮するので、貴方は移住区に避難を」

自分が居るから大丈夫だと言うキツテルに、織斑は彼が歴戦の戦士であると思われてその言葉を信じた。

これにキツテルは元からルリを出すつもりも無いと答え、パイロットスーツを身に着けるために更衣室へと駆け込んだ。女性参謀も戦闘指揮を行うべく、戦闘指揮所へと向かった。

『レーダーに反応！ 敵迎撃部隊！ 照合確認、MS十八機！ IS六機！！ 総数二十四機！！』

「スクランブルか。展開は早いけど、数が少ない。だが、こちらには都合がいい！ お前たち、初の実戦だ！ 腹をくくれ！！」

乗っているかオズガンダムをMA形態に変形させ、キツテル討伐に

向かうヤザンは、教官が乗る僚機からの報告で迎撃部隊の数が少な過ぎることに落胆したが、実戦経験の無いパイロットが大部分を占めているので、彼にとつては都合が良かった。

数はこちらが上だ。数で押せば、一個大隊程度のスクランブルを倒すのはそう時間が掛からない。それに敵部隊はRMS-154バーザムとその改良型である。後は第三世代のIS六機だ。

そう判断したヤザンは、実戦経験の無い者たちに気を引き締めるように言ってから、先に敵迎撃部隊に向けて仕掛けた。

「沈めえーっ！」

敵部隊のベースジャンパーと呼ばれるMS二機が載れるサブフライトシステムに乗るバーザム改に向け、ヤザンはカオスガンダムのMA形態のみが使用できる福相ビーム砲を発射した。

狙われた敵機は先行しており、長距離ビームが来ることを予想していなかった為に、右側に居たバーザム改は胴体にビームを受けて大破した。撃ち抜かれたバーザム改は、火を噴きながら海面へと落下していき、海面に落ちる寸前で爆散する。

「命中か！ 動きが遅いぜ！」

命中して敵機が爆散したのを確認したヤザンは、敵の展開が遅いことを注意しつつ、先の長距離ビームを撃ち続け、味方の部隊に指示を出す。

「三機一隊で一機をやれ！ 数はこちらが多いんだ！ 負けることはない！」

三機一隊で一機の敵機に当たるように指示を出せば、味方のウインダム六十機も展開して敵部隊との交戦を開始しようとした。だが、敵も慌てていないのか、長距離ビームによる反撃を行う。その攻撃を行ったのは、背部にキャノン砲を搭載したIS、ヴァルキュリア・アーチャーV Aである。放たれたビームは、こちらの射程外に居るウインダムを一機撃墜し、実戦経験の無い味方部隊に衝撃を与えた。

「向こうも長距離ビームか！ 中々の狙いだ！」

『う、うわあああ!? 死にたくない！ 俺は死にたくない!!』

『こらあ！ 逃げるな！ 撃墜するぞ!!』

「ちっ、この程度で慌てよって！ だから女にとって代わられちゃうんだ！」

敵の反撃を褒めたヤザンだが、友軍機を目前で撃墜されたのを見て怖気づいた味方のパイロットは逃亡した。敵前逃亡だ。

教官は恐怖が伝染して全員が逃亡を阻止するために、逃げたウィンダムに向けて逃げるなど叫んでいるが、そのウィンダムのパイロットは聞いても居ない。これにヤザンはだから女に取って代わられると文句を言っつて、こちらに弾幕を浴びせて来るバーザム二機と交戦を始める。

『止まらんか！ 貴様は敵前逃亡罪だ！ 死ね！』

『わあああ！ ああああ！？ 熱い！ 熱い！！ 誰か出して！ 出してえええ！！ ママアアア！！』

『ひっ!? ひ、人が死んだ:!? っ!? わっ!』

ヤザンが敵機と交戦を始める中、逃げたウィンダムが静止の声を聞かないので、教官はその味方機を敵前逃亡罪で撃墜した。敵前逃亡罪でビームを背後から撃たれ、火を噴きながら墜落していくウィンダムのコクピット内では、火が機内にも回って来たのか、全身を焼かれて叫び声を上げるパイロットの悲鳴が聞こえて来る。これに恐怖した他のパイロットは、思わず動きを止めてしまい、接近してきたバーザム部隊に二機が撃墜される。

更にVAが動きを止めた六機を撃墜すれば、攻撃してきた敵部隊の練度の低さを見たスクランブルのバーザム部隊のパイロットたちは、ヤザンのカオスガンダム以外は大了たことが無いと判断する。

『敵の動きが変だぞ！ いや、変じゃない！ 実戦慣れしてないんだ！』

『あのガンダムは強いが、ウィンダムは数が多いだけだ！ 俺たちは実戦慣れしていないウィンダムさえ倒せば良い！ ガンダムはISに任せるんだ！』

敵部隊で実戦慣れしているのはヤザンのカオスガンダムだけだと判断したバーザム部隊のパイロットらは、ISのVAにヤザンのカオスガンダムを任せ、自分らはウィンダムを攻撃し始めた。部隊長はそ

の指示を、I S部隊の長に出す。

『我々は敵MS部隊を叩く！ 貴官らはあのガンダムの対処を頼む！』

『MSの相手は貴方たちの仕事でしょ!? それにあいつの方が…!』
『喧しい！ そつちのが高性能だ！ それに階級は俺の方が上だ！
上官命令と思つてやれ!!』

「勝手な…!」

階級が上なことを言い訳に、バーザム部隊はウインダム隊を攻撃し始めた。ヤザンの対処を押し付けられたI S隊の隊長は、向かつてくるカオスガンダムを相手に、死に物狂いで戦わされる羽目となった。
『貴様らー！ さっきの奴みたいになりたいのか!? 死ぬ気で戦え!!』

向かつてくるバーザム部隊に教官が乗る機体を除くウインダムのパイロットたちは恐怖するが、先の教官に撃墜された味方のパイロットのことを言われ、I Sと同じく死に物狂いで戦い始める。

その思わぬ戦いぶりに、バーザム部隊のパイロットたちも驚いたように、何機かが撃墜されて退き気味になる。

『こ、こいつ等！ 督戦隊にでも脅されているのか!?』

『ぞ、増援を要請しろ！ このままでは押し切られる!』

実戦慣れしていないと思つて舐めていたが、教官の督戦隊のようなやり方で死に物狂いで猛攻を仕掛けて来るウインダム隊に圧された部隊長は、援軍を要請した。その援軍は、キツテルのインパルスガンダムとルリのI Sである。他は駆け付けて来る救援部隊だ。

「フン、中々のパワーでスピードだが」

一方でI Sと交戦しているヤザンはI Sの火力と機動力を褒めたが、女性にしか扱えないことが気に入らなかつたらしく、自分の殺気に怯んで動けないそのI Sに接近し、一気に畳み掛ける。

「女しか乗れないのが、気に入らないんだよオーツ！」

その叫びと共に機体をMS形態に変形させ、ビームサーベルを振り下ろした。

ビームの剣を振り下ろされたI Sの絶対防御が働くも、ヤザンのカオスガンダムのビームサーベルは改良されて火力を増しているらし

く、数秒ほど当てられただけで、絶対防衛を貫通して操縦者を蒸発させた。ビームサーベルで切り裂かれたI Sは爆散し、残骸は海へと落ちていく。

「あ、I Sが…!？」

「やられた…!？」

「他愛のない！　これが世界を分捕ったI Sか？　噂ほどでもないぜ！」

I Sが撃墜されたのを初めて見たI Sの操縦者たちは、衝撃の余りその場で固まってしまった。

噂ではM Sを上回る性能と聞いていたヤザンであったが、こうもあっさりと倒せてしまったことに、噂ほどでもないと言う。ヤザンとカオスガンダムとの組み合わせが強過ぎるだけのことであって、I Sが弱い訳ではない。ヤザンの実力が高過ぎるだけである。

「気を引き締めて！　次は私たちよ!!」

最強であるI Sを倒したカオスガンダムに茫然とするI Sの操縦者らに対し、部隊長は指示を出して彼女らを正気に戻す。再び仕掛けて来るI Sに対し、ヤザンはビームを回避しながら反撃する。

「ほう、仲間をやられても、逃げ出すことは無いか。それだけは褒めてやろう。だが、容赦はせんぞ！」

戦場から逃げ出さないことだけを褒めれば、ヤザンは容赦することなく連携を取って向かってくるI Sに襲い掛かった。

一方で出撃準備を始めているキツテルは、無線で先に迎撃に向かったスクランブル部隊の被害が大きいことを知る。

「なに、敵部隊はウイングダム六十機にガンダムタイプ一機だと？　それに迎撃部隊が苦戦している？　このままでは全滅しそうだな。準備が整い次第、救援に向かう！　他の部隊はどうか？」

ヤザンとウイングダムの数が多すぎて迎撃部隊が苦戦していることも知ったキツテルは、直ぐに出撃して救援に向かうと告げ、他の部隊はどれくらいで間に合うかを問う。

『現在、付近に駐屯している出撃可能な空戦部隊は、可能な限り急行さ

せております。ですが、戦闘地域に到着するまで二十分も掛かりません』

「二十分だと？ 遅い！ 十分で来させろ！ 二十分では迎撃に向かった部隊は全滅するぞ！ 良いな!? それとルリのISは出さんぞ。彼女は民間人だ。軍が民間人を頼っていては、名折れだぞ！」

二十分も掛かると聞けば、キツテルは激怒して十分で急行させると怒鳴った。それにルリは民間人だから出さないと告げ、軍が民間人を頼るなど説く。

『ですがカポデイストリアスのISは予備戦力に組み込まれており、それに現状ではこちらが…』

「それでも戦うのが軍人だ！ 軍が民間人を守らんでどうする？ 貴様も軍人なら、腹を括って身を挺して民間人を守れ！ 私は出撃するぞ！」

『はっ！ そちらに敵部隊のデータを送ります！』

異論を唱える管制官に対し、キツテルは軍人が守るべき民間人を戦わせることを責め、例え負ける戦いでも戦うのが軍人と説教を行い、それから出撃すると告げた。

歴戦錬磨で英霊でもあるキツテルに論された管制官は、彼の言葉に促されて軍人としての誇りを胸に腹を括れば、インパルスガンダムに向けて観測した敵部隊のデータを送信する。データを受信したきつては、敵部隊の現状戦力を確認した後に出撃すると伝える。

「データ受信確認！ 出撃する！」

カタパルトは無いが、機体背部に搭載されたフォースのスラストターボを吹かせて空中高く飛び、キツテルのインパルスガンダムは戦闘空域に向けて出撃した。

戦闘空域は近く、全速力で急行すれば物の二分で戦闘空域に到着する。キツテルのインパルスガンダムを見付けたジェットストライカー装備のウィンダムは、直ぐに手にしているビームライフルを撃ち込んでくる。

『死ねえ!!』

「下手な射撃を！ それに遅い！」

容易に避けられるほどであり、飛んでくるビームを躲したキツテルは遅いと言つて、素早く機体のビームライフルを敵機に照準して撃ち込む。

敵のウインダムのパイロットはこれが初陣であり、まだ戦闘のコツを掴めていなかった。対するキツテルはMSに乗るのが初めてでも、既にコツを掴んで熟練レベルに達しており、相手が悪すぎた。

素早く来た反撃のビームをパイロットは避けきれず、そのまま機体に命中して火を噴きながら海面へと落ちていく。先の動きで、キツテルは相手が素人の集団であると分かった。

「碌な訓練もせずに出て来たのか。素人を投入するとは……！ ウィンダムを使うなど、一体どこから支援を受けているんだ？」

なぜ高価な機体であるはずのウインダムを装備しているか疑問に思ったキツテルは、ウインダムを正式採用している連邦軍が支援していると思っていたが、普通の軍隊ならこんなお粗末な状態では出さない。直ぐに支援組織は連邦軍では無いと判断し、別の勢力であると思われる。

「見え見えだ！」

続けざまに背後からビームサーベルで斬りかかって来るウインダムがいたが、キツテルにあつかりと避けられ、背中に蹴りを入れ込まれ、そのままビームを撃ち込まれて撃墜される。

例えば教官が乗るウインダムでも、キツテルのインパルスガンダムには敵わないだろう。三機目と、続けて四機目を撃墜したところで、三機目のISを撃破したヤザンのカオスガンダムに見付かる。

『見付けたぞ！ ニコラウス・アウグスト・フォン・キツテル！』

「私の名前を!? 何者だ！」

自分の名前を、それもフルネームで言ったヤザンにキツテルは何者かと問う。これにヤザンは、戦うためにやって来たと言乗りながら答える。

『ヤザン・ゲールだ！ お前と戦うために、わざわざやって来たんだ！ お前の本は読ませてもらった。少し脚色臭いが、先の動きで本物と見た。戦うには十分過ぎるぜ！』

「それだけで、仕掛けてきたというのか!？」

『そうだとも！ 本を読んでいれば、お前も戦いたくてウズウズしてたんだろう？ お前も俺と同じムジナと言うわけよ!』

「お前と同じにするなァーッ!!」

名乗りを上げて単に戦いに来たただだと答えるヤザンに対し、キツテルは怒りを覚えたが、同じムジナであると言われる。

確かに内心では前線に戻り、戦場の空を飛びたいと思っていたが、それほど戦闘狂ではない。ヤザンのこの言葉に激怒したキツテルは、敵機のカオスガンダムに向けてビームを乱射したが、冷静さを欠いた攻撃であるために、容易に避けられてしまう。

『フハハハ、お前らしくもない攻撃だな！ どうした、バルキリーじゃないから本調子じゃないのか？ それでは、この俺は落とせんとぞ!』

ヤザンに指摘されたキツテルは冷静さを取り戻し、的確な射撃を行うも、彼のカオスガンダムは乗っている者の実力も伴って当たらず仕舞いだ。

だが、あちらの攻撃も同じ。キツテルは撃ち合いでは埒が明かないと判断してか、ヤザンのカオスガンダムにビームサーベルを抜いて接近戦を挑んだ。

『このヤザンに接近戦を挑むつもりか！ 面白い！ 元騎兵隊将校の実力、確かめさせてもらうぜ!』

戦闘機パイロットであるキツテルが接近戦を挑んできたことに、彼の自伝を読んでいたヤザンは、騎兵隊将校の実績がどれほど残っているのか興味が湧いたらしく、同じくライフルを仕舞って接近戦に応じる。

キツテルは騎兵隊として経験で敵が間合いに入る前にビームサーベルを上げ、間合いに入った瞬間に振り下ろそうとしたが、ヤザンはそれを読んでおり、振るわれた瞬間に躲す。

「っ!？」

『MSと馬は違うんだよ！ 海へビを食らえ!』

回避しきれない速度で迫ってからサーベルを振るったのだが、避けられてしまったことにキツテルは動揺した。これにヤザンは空かさ

ず、乗って来た機体に装備させていた電流武器である海へびを撃ち込む。

飛んでくる海へびの先端にキツテルは気を取り戻して操縦桿を握り、回避行動を行おうとするが、海へびの方が速く、胴体に先端が命中した。そこから高圧電流がインパルスガンダム全体に流れ出し、コクピット内にも及び、電流がキツテルの身体を襲う。

凄まじい電流が全身を走れば、それに伴う激痛がキツテルを襲い始める。余りの痛さに、キツテルは叫び声を上げる。

「ぐわあああ!？」

『海へびの味はどうだ!? 上手いだろう! MSは騎兵のようにはいかんぞ! 火達磨になるまで痺れさせてやる!』

ヤザンはキツテルを高圧電流で殺すようだ。その間に味方機は多数のウインダムによって落とされておろし、残りはヤザンの海へびで苦しめられているキツテルのインパルスガンダムを含め、IS三機にバーザム三機、バーザム改一機を合わせて八機である。

『そのまま焼け死ねえ!』

「うわあああ! ああああ!」

これでヤザンはキツテルを倒せると思っていたが、ここに来て思わぬ敵の増援が現れた。

『っ! なんだ!?!』

自分に向けられた殺気、自分のカオスガンダムに目掛けて飛んでくるビームに気付いたヤザンは、直ぐに海へびを戻して回避行動を取った。放たれたビームは外れたが、一秒もしない内に二射目が来て、友軍のウインダム二機を撃ち落とす。

直ぐにヤザンは索敵を行い、ビームが飛んできた方へカメラを向け確認する。それは、ビットを展開してこちらに接近してくるルリのISであった。

『小娘の乗ったISだと!? ふざけやがって!』

「まさかルリなのか!? なぜ来た!？」

乗っているのが戦場に似合わない可憐な少女であると分かったヤザンは苛立ち、ルリが救援に来たことに、キツテルは怒りを覚える。

軍人として、民間人である彼女を出すつもりは無かったキツテルであるが、ルリの救援が無ければ電流で殺されていた所だ。彼を助けに来たルリは、無数に来るウインダムと交戦を開始した。